

# 「作り笑い」表情の理解と社会的スキルの関連

—自閉スペクトラム症者の視線に着目して—

今村 菜

田中真理

(福岡市立東部療育センター)

(九州大学)

KEY WORDS: 作り笑い, 社会的スキル, 自閉スペクトラム症

## 【問題と目的】

「作り笑い」は、社会的関係を円滑に維持するために日常的に多用されている社会的技能の一つであり(押見;1999)、ネガティブな感情表出を抑制しポジティブな感情を表出する(井上;2008)日本文化特有の曖昧さを含む表現形態でもある(李ら;2014)。この曖昧表現に含められている他者の意図理解や場を適切に読むことができず、日常の社会的文脈で不適応状態を顕著に示すのが自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD)である。ASD は、対人的相互作用における質的な障害を示すことから(APA;2013)、ASD 者の非定型発達について理解することは、ASD の理解に貢献するのみならず、社会的メタコミュニケーションの定型発達を理解するうえでも重要である。しかし、ASD 者の表情・社会性研究では「作り笑い」を切り口とした研究は皆無に等しい。「作り笑い」現象を直感的に理解するのか(直感的心理化)、言語的類推によって命題的に理解するのか(命題的心理化)は、ASD の原因を何に求めるのかの議論(Frith;2004)とも関わる。

そこで、本研究では①ASD 者の「作り笑い」判別と社会的スキルとの関連、②「作り笑い」判別時の視線の動きにおけるASD者と定型発達者との比較、③ASD者における「作り笑い」に関する認識、の三点について探索的に検討する。

なお本研究では「作り笑い」を「意図的に表出される、面白おかしいといった自然な感情によらない表向きだけの笑顔を伴う笑い反応」と操作的に定義する。

## 【方法】

- 1. 調査協力者:** 知的障害のない ASD 青年 10 名(男:8 女:2, CA:21.3±4.76)、定型発達青年(以下、TD)16 名(男:9 女:7, CA:22.4±1.71)。
- 2. 調査内容:** ①Kiss-18: 社会的スキルを測定する 18 項目(菊池, 1988)。回答は 5 件法。②画像判別課題: 「自然な笑い」「作り笑い」表情画像各 28 枚を呈示し、協力者に選択を求めた。課題中は、アイトラッカー(Tobii Pro X3-120)を設置し、各画像提示から選択までの視線の動きを測定した。③笑いに関する意識調査: 「自然な笑い」「作り笑い」の定義・表出・理解の捉え方に関する 7 項目(「自然な笑い(作り笑い)とはどのようなものだと思いますか」「作り笑いを相手にされたとき、どのように感じますか」「自分が作り笑いをしているときはどのような時ですか」等)。
- 3. 実験手続き:** 課題の呈示は、約 2 秒間インターバルを間にはさみながら、「自然な笑い」と「作り笑い」を疑似ランダム化して呈示。(Figure. 1)



Figure. 1 実験手続き

**視線データの取得:** 表情画像ごとに額、両目、左右の目、鼻、口の 6 つに AOI (Area Of Interest) を設定した。

- 4. 倫理的配慮:** 九州大学臨床心理学講座研究倫理委員会の審査をうけ承認された。インフォームド・コンセント、プライバシーの保護、公表への同意を得ている。

**【結果】 1. 社会的スキル得点と「作り笑い」画像判別得**

**点の関連** TD 者の内 2 名を除外した 14 名でピアソンの積率相関分析を行ったところ、有意な正の相関が認められた ( $r = .41, p < .05$ )。一方で、ASD 群 10 名に同様の分析を行ったところ、相関はみられなかった ( $r = .62$  n.s.)。

## 2. 「作り笑い」画像判別時の ASD・TD 者の視線分析比較

各群の画像判別課題の各 AOI の視線停留時間・注視回数において対応のない  $t$  検定を行った結果、「作り笑い」課題の左目における視線停留時間のみ有意な差が認められた ( $t(24) = 2.62, p < .05$ ; Figure. 2)

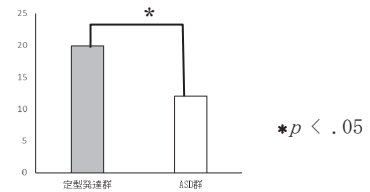


Figure. 2 定型発達群と ASD 群の「作り笑い」表情の左目における視線停留時間の差

## (1) 同程度の「作り笑い」画像判別得点および社会的スキル得点を示す ASD・TD 者の比較

各群において判別課題得点・Kiss-18 得点が近似値を示す、TD 者(以下、TD)と ASD 者(以下、ASD)の比較を行った結果、各 AOI において TD の方が ASD より視線停留時間が長く、注視回数が多かった。

## (2) ASD 者における社会的スキル得点の高低による比較

ASD 群において Kiss-18 得点・判別課題の正答数の平均以上に該当する上位群 3 名、また平均以下に該当する下位群 2 名を抽出し、比較検討を行った。その結果、上位群においては TD 群と近似したストラテジーを用いるものが見受けられ、下位群においては ASD の障害特性と呼ばれる傾向が顕著に示され、笑いの判断基準が TD 群や ASD 上位群の捉え方とは逆であることが明らかになった。

**3. 「笑い」に関する意識** 「自然な笑い」の理解の項目について、TD 者では「自然な笑い」の表出に対してポジティブな受け取りをするのに対して、ASD 者はネガティブな受け取りを行う傾向が見られた(「疑って考える」「自分が原因で笑っているときは何かやらかしたかなと思う」等)。「作り笑い」表出場面については、相手を気遣う・ポジティブな印象を伝える・周囲に同調等、TD 者・ASD 者で共通していた。

**【考察】** TD 者では「作り笑い」の理解と社会的スキルの高さとの関連が示され、「作り笑い」は、社会的関係を円滑に維持するために日常的に多用されている社会的技能となっているといえる。「作り笑い」画像判別得点および社会的スキル得点においては同程度の ASD 者と TD 者であっても、表情判別時の視線の動きに差がみられたことから、ASD 者においては非定型なストラテジーを用いて「作り笑い」判別を行っている可能性が示唆された。また、「自然な笑い」に対する ASD 者独自の解釈が示され、自己評価の低さや被害感の強さなど二次障害の様相も背景にあると考えられた。

(IMAMURA Shiori, TANAKA Mari)

\* 本研究は、科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究 課題番号 17K18707・研究代表者:田中真理)による。